

## 連無草

つれづれなきまゝに、日くらし、デバイスにむかひて、心に移りゆくよしなし事を、  
そこはかとなくキーをたたけば、あやうこそものぐるほしけれ

徒然草(吉田兼好)の響きを模したタイトル

大阪ではその場に一緒にいる友達も『連れ』という時もあり、  
一概に 配偶者のみに限定した言葉ではありません

---

(参考) 徒然草(吉田兼好)

鎌倉時代末期～南北朝時代初期にかけて (1330 年代頃)

つれづれなるまゝに、日くらし、硯にむかひて、心に移りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやうこそものぐるほしけれ

### \*意味

つれづれなるまゝに → する事がなくて退屈なままに。

日くらし → 朝から晩まで、一日中。

心に移りゆくよしなし事 → 心に浮かかんで消える、どうでもよい事柄。

そこはかとなく書きつくれば → とりとめもなく書きつけてみると。

あやうこそものぐるほしけれ → 妙に気狂じみた (狂おしい) ことだ。

「連無草」の意味は「徒然草」の文に当てはめて内容を考えて下さい